

認知症早期発見体制整備へ

北栄町と鳥大医学部 臨床研究を実施



嗅覚機能検査を受ける参加者。14日、北栄町田井の北条高齢者福祉センター

北栄町包括支援センターと鳥取大医学部などは、認知症を早期に発見して治療につなげる体制整備に向けた臨床研究を昨年12月から同町で展開している。60歳以上の希望者を対象に身体能力や生活習慣に関する検査を行い、認知機能低下の兆候と治療までの対応手順を探る。研究期間は今年3月末までを予定している。厚生労働省が昨年度から

全国8地区の医療・研究機関と展開する「共生に向けた認知症早期発見スクリーニング体制の構築」研究の一環。中国地方では鳥取、島根両県が対象地区に選ばれており、昨年度は琴浦町と島根県隠岐の島町で実施

した。日本認知症予防学会前理事長で同医学部の浦上克哉教授が研究を主導。昨年未までに約1200人が協力した。検査では、液体の匂いを嗅いで何の匂いかを選ぶ嗅覚機能検査▽筋肉量などを測る体組成測定▽生活習慣アンケート▽脳の健康チェックの4項目のデータを集める。今月中旬に同町田井の北条高齢者福祉センターであった検査には約40人が参加。浦上教授の講演もあり、難聴や社会的孤立が認知症のリスク因子になっていることが説明された。物忘れが気になり参加したという女性(75)は「認知症の傾向なし」との判定を受け、「ほっとした。安心できただけでも参加してよかった」と話した。浦上教授は、「調査結果は認知症の早期発見、早期

対応の指針となり、全国の地方自治体で役立てられる」と研究の意義を強調した。(本高屋修)